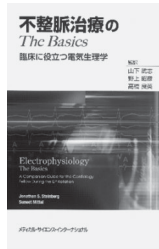


書評

【評者】
栗田隆志
近畿大学准教授・医学部循環器内科



不整脈治療の The Basics 臨床に役立つ電気生理学 山下武志, 野上昭彦, 高橋良英 監訳

A5 変形判 頁312 2/4色
定価 5,250 円(本体 5,000 円+税 5%)MEDSi 刊

評者が心臓電気生理学(EP)を志したのは1980年代後半、新しい概念や治療法の臨床応用が始まろうとする黎明期にあった。私と同世代のEPドクター(おそらく本書を翻訳した多くの先生方)にとって、若かりしフェローの時代は基礎的な(しかも当時はそれで十分な)知識を徹底的に学べばよかった。その後の20年、EPの目覚ましい発展がそのまま自身の知識と技術の進歩と連動しており、新たな展開をリアルタイムで体験することができた。

一方、現代の若いフェローにとって「臨床心臓電気生理学」はそのいかつい名前と同様に、圧倒的な存在感を伴って彼らの前に立ちはだかる。心室頻拍(VT)患者を受け持ったフェローを例に取ってみよう。患者が何とか急性期の危機を乗り越けても彼(彼女)に休息の時間はない。VTの基礎知識と心電図所見を理解し、EP study やアブレーションの適応判断とそのデータを解釈し、ICD 植込みの検討を迫られる。矢継ぎ早の攻撃だ。どこから手を付ければよいのか、海図なしで大海に浮かんでいるような不安感。「誰か助けて!」

このような状況を一気に打開するのが本書、「不整脈治療の The Basics, 臨床に役立つ電気生理学」であろう。原著名は“Electrophysiology: The Basics”であるが、監訳者は敢えて書名の始まりを「不整脈治療の……」としている。フェローが少しでもEPに馴染みやすいようにとの心遣いである。

むろん優れているのは書名だけではない。一読しただけできわめて実地医療に即した内容であることがわかる。一つの疾患が多様な切り口で理解できるように工夫されているのが最大の特徴である。本書を持っていれば、先ほどのフェローはどうなるか。まずは心電図波形の解釈。Wide QRS tachycardia の鑑別診断を見る(242ページ)。「VTに間違いない」。次いで86ページを読む。「起源は左室だ」。VTの急性期治療「どうやって止める?」——抗不整脈薬の一覧表(254~255ページ)を見る。「アミオダロン静注薬を使おう。記載

されている投与方法の通りに」。VT 停止後、前壁中隔心筋梗塞を基礎とするVTと診断され、EP study とアブレーションが予定された。その適応は148ページと158ページを読めばエビデンスに依拠した理解ができる。いよいよEP study 当日、検査室にて標的としたVTが誘発された。頻拍中の血圧は何とか安定している。緊迫した雰囲気の中、指導医はアブレーションへ移行する指示を出す。「どうやって回路を同定し、治療するのか?」——全ての問いかけに対する回答が第4章、第9章に準備されている。指導医が局所の電位所見、ペーシングに対する反応を次々と確認していく。ついに通電のゴーサインが出た。フットスイッチを踏む。ジェネレーターから発射音が出る。心拍を示す電子音の間隔が開いてくるのがわかる。レートが落ちているのだ。「止まれ!」——祈りを込めてスイッチを踏み続ける。その数秒後、VTは見事に停止した! たまらない臨場感。一気にEPへの興味が湧く。「凄い!」

しかし、その翌日、指導医はICDの植込みを指示した。「アブレーションが成功したのになぜ?」——188ページをめくると、左室駆出率30%、NYHAクラスIIの心不全が根拠であるとわかる。ICDの手術は無事終了し、後は退院を待つばかり。しかし、夜間にナースから連絡が入る。患者の心拍数が設定レートより遅く、不具合ではないかと言うのだ。指導医は帰宅している。「どうする?」——220ページを読む。「よかった、レートヒステレシスだ。異常はありません」。ナースから驚きと尊敬のまなざし。

本書の特色は他にもある。例えば白衣のポケットに携帯できるように、薄く細長くデザインされている。各項の末尾にはKey Point が設けられ、瞬時の判断が求められる場面にも対応できる。また、第12章にはデバイス取り扱い業者の緊急連絡先(むろん国内の)までもが記載されている。このように本書には不整脈治療の実践的入門書として粋な計らいが随所に配置されている。若手医師に自信を持ってお勧めする必携の書である。